# 阪神大震災体験記

随　筆

斎藤基彦*

## Hanshin Great Earthquake and I

***Key Words*** : Hanshin Great Earthquake, risk management

ぐらぐらと激しい揺れがきて眼が覚めた．ふとんをかぶっていたら，どどーっと本がふとんの上に落ちてきた．

1995年1月17日未明の5時46分頃，淡路島北端を震源とする直下型の地震が起きた．地震の規模はM7.2，私の住んでいる阪急宝塚線中山駅近くでは震度7の激震であった．我家も含め，近所の木造家屋の8割程度は全壊であった．ここでその地震体験を記すことにする．お断りするまでもなく多くの方々が被災されており，それぞれの方がそれぞれ違う体験をされている筈だから，ここで述べる経験と感想は極めて個人的なものである．

我家は木造平屋の借家で，地震当時私は和室に寝ていた．揺れで眼が覚めたときは，東京での経験から震度4位の揺れなので，すぐおさまるだろうと思いふとんをかぶった．と思う間もなく烈しい揺れがきて，物が落ちてきた．これは普段と違うぞと思いふとんから顔を出すとすごい土ぼこりであった．電灯が揺れ天井板が抜けている．庭に通じるアルミのサッシ戸が無い．外はまっくらである．大きな地震で家の建てつけに被害がでたようだ．

*Motohiko SAITOH
1941年1月2日生
1969年東京大学理学研究科（物理学専攻）博士課程修了
現在，大阪大学理学研究科（物理学専攻），教授，理学博士，固体物理理論
TEL 06－850－5734
FAX 06－850－5764
E-Mail saitoh@phys.wani.osaka-u.ac.jp

家内が見えないので呼ぶと，台所から冷蔵庫の下にいて身動きとれないが大丈夫と返事がある．すぐに台所へ行こうとするが大変だった．寝室の中は洋服タンスや本箱が倒れ，和タンスの引き出しが散乱しており，台所に通じる廊下は両側から土壁がくずれ，そもそも入口の戸が半分しか開かない．身体をねじって台所に入ると冷蔵庫が食卓の上に倒れている上，床にガラスが散っていて，足場が悪い．暗くて良く見えないし，寝起きのかっこうでは危ないし寒い．あらためて服を着，靴をはき，軍手をし，毛帽子をかぶり，ヘッドランプをつけて戻り，無事家内を救出した．そしてガス栓を閉めた．家内は怪我は無いというので，防寒の服装で靴をはき庭に逃げるよう指示した．戸や窓ははずれて無くなっているので逃げるのは楽であった．しかし家内は忘然自失で頭も体もいう事をきかなくなったようだ．私は再び寝室にもどり，財布・定期入（免許証・クレジットカード等が入っている）・時計・鍵・眼鏡・持薬・カバンを探し出し，また押入れにあったアウトドア用具一式を庭に持ち出し一心地ついた．

あらためて家をながめると，柱は傾き，外壁のモルタルは落ち，全ての部屋で土壁が抜け，物が散乱していて足の踏み場もない．庭もすごかった．落ちた瓦が散乱し，隣家との境のブロック塀は全て倒れていて視界をさえぎる物がない．物置が倒れていないのが不思議な気がした．北側は家が倒れかけていて危なくて近づけない．玄関は通過不能だ．外に持ち出さなければならない物を考えるが，なかなか考えがまとまらない．銀行関係・勤務先関係はOK，アウトドア

用の炊事道具，非常食，寝袋，テント等々，とりあえず必要な物はあるようなのでホッとする．中はメチャクチャで片づける気はしない．やがて空が白みはじめた．ふと道路をはさんだ前を見ると，新築6階建ての民間マンションが約30度位傾むいている．どうやら被害を受けたのは我家だけではないようだ．不思議に静かだった．早く夜が明け，救援が来ればいいなと思い庭にすわりこんだ．

どの位時間がたったのかわからないが，隣のNさんの奥さんがまわりが大変で助けてくれととび込んで来た．その時，助けが来るのを待っていても仕方がない，自分で行動しなければならないのだと，はっと気がついた．近所を見まわると2階建ての住宅はすべて傾き，中には1階に落ちている家もある．これは大変だ．中に人が埋っているかもしれない．

それからが大変であった．怪我をして歩けないMさんを背負って車に運んだ．Sさんのお宅では御主人がつぶれた1階に埋まっていて動けないという．埋まった所に達するためには落ちた2階にあがり，床をはがしていかなければならない．我家の木工道具箱が出動し，鋸ではりを切る事にした．実際にやってみるとこれが大変な仕事である．一人しか入れない狭い場所で，小さなストロークで太いはりを切るのだが，1ヶ所切るのに5分も10分もかかる．こういう所では植木の枝切り鋸が，柄が短かく片手で使えるので案外役に立つ事に気がついたりする．交代で鋸をひく．Gさんの平屋は一階部分がつぶれ，屋根だけが無傷で地面にかぶさっている．母上と奥様が埋まっているという．瓦をはがし天井のはりを切っていかなければならない．ピッケルと鋸をお貸しするが道具が小さくて大変である．

昼頃になると近所の人々の安否がかなりはっきりわかってきた．独り暮しのS′老人が居ない．このお宅も2階が落ちているからやはり埋まっているようだ．救援の若者に掘ってもらう事にした．私は午前中の緊張のためか疲れが出てへたり込んでしまった．喉がからからに乾いてしまった．朝から水も飲まず，食事もせずである．もうおにぎりとお茶のさし入れがあっても良い頃だがと思うが，ご近所の方々が懸命に働らいているだけで他の人影はない．我家の前のスーパーはシャッターがおりたままだ．駅前にコンビニがあるが，そこへ行く3，4分の時間が惜しい．人手が欲しい．大型の道具が欲しい．しかし皆自分の事で手いっぱいで余裕がない．

午後2時頃Gさんの母上が遺体となって掘り出された．私の車で病院まで運ぶ事になった．他の車は鍵が見つからなかったり，倒れた電柱でブロックされ，使える車は私の車だけなのだ．道路は大変渋滞していた．交差点の信号が点灯していない．ふと23年前イギリスで経験した電力ストライキを思い出した．あの時も信号が全部機能しなかったっけ．病院ははちの巣をつついたような騒ぎだった．次から次へと怪我人やそしておそらく亡くなられた方々が運び込まれている．Gさんは検死に立ち合わなければならないというので，私は自宅に戻る事にした．

午後遅くおにぎりとお茶が届いた．被害の軽い近隣の人々からの差し入れである．しかし食欲がわかない．50歳を過ぎたなまった身体に肉体的・精神的疲労がたまったのだろう．倒れた電柱に腰をかけ，この地震の被害はどれ程なのだろうか，関東に居る家族に連絡をしなければとか，今日はどこに泊ろうかなどと漠然と考えた．そういえば朝から新聞もテレビも見ていない．

中山駅前の公衆電話で家族に連絡しようと駅前に行くと，当然だが阪急宝塚線は不通であった．電話は長い列で30分以上待たないと順番がまわってこないし，テレフォンカードは停電のため使えないという．市外電話をする程のコインの持ち合せがないし，第一待つ時間がもったいない．電話はあきらめる．飲み物をと思いコンビニに行くが，やはり長蛇の列だ．店員は金銭レジが使えないので，筆算で計算し品物を売っていた．これもあきらめて自宅に戻った．

家族に短い連絡がついたのは夕暮になっていた．東京方面ではテレビでニュースを知り，大変心配していたようだ．再びコンビニに行ったら食料品は勿論，懐中電灯，電池，ガスボンベ等は全て売り切れといわれた．世の中の人はな

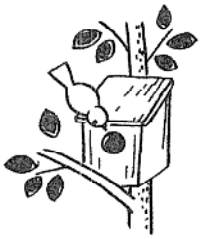
かなかはしこいなと妙なところに感心した．しかしもっと感心したのは，人の気配のない我家の前のスーパーで略奪がない事だった．皆困っておりこういう緊急時なのに，社会のモラルは案外高いのだ．人間というものは急場では良い性格を発揮するなと思った．もっとも泥棒も地震の被害で忙しかったのかもしれない．

日も暮れ夕食と泊る場所を心配しなければならなくなった．御近所の人は皆親戚の所に避難した．我々は関西に親戚はいない．我々の地区の避難所は何処だろう．中山寺門前の集会場をのぞいてみた．内は薄暗く，数人の老人が着のみ着のままで，だまってうずくまっている．毛布も食料も明りもない．行政の対応の遅れに腹が立った．この際自分の身は自分で守らなければならない．幸い家内は友人が引きとってくれる事になった．私は一人で身軽になった．こうなれば私自身は山で野営の経験があるから大丈夫だ．しかし我家一帯はガスがもれていてくさい．天然ガスだから窒息はしない筈だと思うがやはり気持が悪い．大学の研究室に行く事に決める．暗くなって大学の事務の方２人がＧさんの所の調査・見舞いにみえた．ようやく外の世界の人と連絡がとれた．彼らは車渋滞のため山本駅付近で車を乗り捨て歩いてこられたという．途中の旧国道がガスもれのため不通になっているという．お二人を車で送り，夜６時半頃大学に着いた．

大学に来ると妙な違和感を覚えた．大学より10km離れた所では生活はメチャクチャに破壊されているのに，ここは正に日常の世界だ．修士論文・博士論文で追い込みの院生は居るし，数名の同僚も待機している．皆心配してくれていた．その時はじめて，地震でやられたのは我々の所だけではなく，神戸方面は火事でもっとひどい事になっているらしい事を知った．

その晩は同僚の家に泊めていただいた．テレビではじめて被害の全貌を知った．死者が数百人（この数字はその後１日当り千人位ずつふえて，最終的には５千人を越える数となった），そのうちおそらく２/３以上が60歳以上のお年寄りだ．悲惨の一語につきる．自分の体験がずっとましである事がわかった．道理でいくら待っても救急車も消防も警察も来なかった訳だ．彼らは彼らで大変だったのだ．その晩は翌日以後の家の後かたづけの段取りを考えて寝た．こうして長い長い一日が終った．

話が長くなるので自分自身の体験談はこの位する．今回の地震で得た教訓をいくつか思いつくまま述べてみる．ただし災害後１週間位に必要な事で，長期的に必要な事は別途考える必要がある．まずはじめに家の下敷きになって死なない事が肝要である．そのためには頭の部分に物が直撃しないように丈夫な空間を作る事である．私の場合は枕元に机があり，タンスの直撃をまぬがれた．もっとも机はそのため足が折れた．次に他人をあてにしない心がまえが必要である．これだけの規模の災害になると，直後の行政の助けはあてにできない．望むらくは昔の隣組のような組織があると良い．それに共用の大型工具・消火道具の備えが必要．時代劇に出てくる町角の防火用水とか田舎の青年団の消防団のようなものである．近所づきあいがなくこれがむずかしい場合は，少くとも近所の住民は互いに顔位は覚えておく必要がある．次に個人の備えであるが，私の場合はアウトドア用具一式を持っていたのが精神上非常に楽であった．もっとも水の用意がなかったので完全ではなかったが．また昔東京で子供と一緒になまず号（地震シミュレーション車）で震度６の地震の疑似体験をしていたのも大いに役立った．食料は比較的早く差し入れていただいたから，あとは衣類と防寒具があれば何とかなる．お金とか印鑑は数日間はあまり必要を感じなかった．むしろ自動車の鍵とか自転車の鍵，持薬，眼鏡などの品物が最重要であった．こういう困難な時は，人間性善説が本当であると思った．いろいろ皆さんに助けていただいた．また怪我なく元気に暮せるありがたさというものもしみじみ感じた．物への執着も消える．もっとも凡人の悲しさで，物欲はしばらくたつと徐々にもどってくるようであるが．

最後にリスクマネージメントについて愚見を述べたい．通常行政機関で防災対策は良く議論されている．やれ建築規準とか情報網の整備とか地震予知とかである．しかしむしろ大切なの

は災害が起った後の対策であると私は考える．良いシステムを構築するという事は大切であるが，それがこわれる可能性を考えよという事だ．そしてこわれたらどうするかの対策を考えておかなければならない．技術者はこわれる事を前提にして，修理の容易なシステムを設計する必要がある．発想の転換が必要である．最近の日本海での石油タンカー沈没事故のように，対策は放出された原油をひしゃくですくうだけという原始的なのもなさけない話である．もう少しましな修理修復技術を考えておくというのも技術者の役目ではなかろうか．そのためには豊かな想像力が必要だ．「大惨事は人災だ」という回文があるそうである．